

「超音波診断」第2版

日本超音波医学会 編

順天堂大学・消化器内科

有 山 襄

消化器疾患の診断に超音波検査は不可欠である。特に小病変は血清学的・免疫学的検査では診断困難で、超音波検査を行わなければならない。われわれの経験では外来で超音波検査を行うと有所見率は約60%で、高率に消化器疾患が発見される。肝、胆道、脾の小さな癌の診断が可能になり、早期診断・手術によって治癒する症例が増加しつつある。超音波集検も盛んに行われ、15施設の集計では肝胆脾疾患の発見頻度は検診総数39,000人に対して28%である。癌の発見頻度は0.073%と低い。切除率は40%と高率で、超音波集検は無症状の癌の発見に有効であることがわかる。

日本超音波医学会編集による「超音波診断」第2版が上梓された。序文で竹原靖明編集委員長は日本超音波医学会編集の書としての信頼と權威を保つべく、積極的かつ慎重に検討を重ねたと記しておられるが、本書はそれにふさわしく、現在の超音

波診断と治療の道標と言える。内容は超音波の基礎から頭頸部、体表、循環器、呼吸器、腹部、泌尿器、産婦人科の診断と治療応用まで幅広く記載されており、もれがない。内容が豊富な割にはコンパクトにまとまっているが、解説は無駄を省き必要事項は詳しく述べられ平易なので読みやすい。値段も手頃である。

腹部領域の超音波診断の項では手技と使用装置に始まって肝、胆道、脾、消化管、後腹膜、小児の腹部疾患、急性腹症、腹部外傷、特殊検査について超音波の正常パターンと良・悪性疾患の所見が詳しく記載されている。超音波像は最新の装置によるもので明瞭でわかりやすく、病変の所見がよく描出されている。シェーマや切除標本の写真が適宜配置され、超音波像と対比できるようになっている。プローブの走査位置を明らかにするために超音波像の横にボディマークがついており、スキヤンの方向がわかるのは特に初心者

にとって超音波像と解剖を理解するのに役立つ。特殊な超音波検査として超音波内視鏡、超音波穿刺、術中超音波、腹部ドプラ検査が取り上げられている。超音波内視鏡ではリニア型、ラジアル型、腹腔鏡超音波が個々に記載されており、それぞれの特徴と施行方法が理解しやすい。文献も多からず少なからず、重要なものが選ばれている。

本書は超音波診断およびその応用手技を行う者にとって必読の書である。初心者から熟練者まで役に立つ内容が豊富に含まれている。専門以外の疾患の診断を行うときにも参考になる。超音波医学会の威信をかけてこのようなすばらしい超音波診断の本を作られた編集委員、執筆者各位に敬意を表する。

● B5 頁992 図449 写真1162
原色図167 1994 定価22,660円
(税込) 7600

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)